# ４．３歳以降に診断された発達障害児の問題
## —早期発見のための機能評価について—

鈴木　康之*　　松尾多希子*

### 要　約

心身障害児の早期療育に欠かせない，早期発見基準の設定について検討した。乳幼児期の健診におけるスクリーニングに活用できることを目標とした。

従来の健診体制で見落とされた年長児の発達外来受診児を対象に，障害のタイプ，病歴，神経所見，発達検査の特性などを検討した。

20例の分析から，３歳児健診時の多動，視運動機能障害，不器用などが注意されていれば早期発見されていたものと考えられた。限られた健診時間の中で，発達境界児を早期発見する上で，これらの項目を見落とさないことが大切であると考えられた。今後，より本質的な健診項目の評価を設定することによって，発達境界児の早期発見を可能にする必要があると考える。

### 目　的

乳幼児健診体制の中で異常を指摘されずに，年長・学齢になって問題となる例が多くみられる。これらの例の多くに早期からの関わりを持っていれば，機能障害を軽減できたのではないかと考える。そこで，これらの群の早期発見が可能になるように，個々の例の経過を検討した。

### 対　象

最近５年間に本院外来を受診した20例で，男児14例，女児６例。受診時年齢は平均７歳６カ月であった。異常に気付いたのは，母，17例，保健所，２例，近所の人１例であった。主訴は，言葉が遅い９例，落ち着きがない３例，学業不振３例，集中力がない２例，不器用３例，多動１例，友達と遊べない１例である。

臨床診断は，精神発達遅滞（以下MR）11例，学習障害（以下LD）７例，自閉傾向１例，多動１例であった。各群の男女比，初診時年齢，平均在胎週数，平均出生時体重は表１に示す。周産期リスクについてはMR群では11例中４例で，

表　1

| | 男児：女児 | 初診時年齢 | 平均在胎週数 | 平均出生時体重 |
|---|---|---|---|---|
| M　R(11) | 7：4 | 8Y4M<br>(4Y3M－14Y) | 39W0D<br>(36W－42W1D) | 3015 g<br>(2550－3720 g) |
| L　D( 7) | 5：2 | 7Y6M<br>(5Y5M－10Y6M) | 39W4D<br>(36W－42W) | 2968 g<br>(2260－3470 g) |
| 多　動( 1) | 1：0 | 4Y5M | 40W | 3900 g |
| 自閉的( 1) | 1：0 | 4Y3M | 39W | 4170 g |

*東京小児療育病院

LD群では，７例中２例に，また多動の１例にみられた(表２)。新生児期の異常として，MR群11例中４例に哺乳障害，２例に嘔吐が，LD群で１例に哺乳障害がみられた。

歩行開始については，MR群の平均は16.4カ月(11～20カ月)で，遅い傾向があり，LD群では平均14.6カ月(11～17カ月)であった。

各症例におけるIQ分布は，MR群では，40～81に分布した。LD群では67～102であった。自閉傾向の児はMCCベビーテストでDQ33，多動の児は田中ビネーでIQ81であった。

神経所見の異常については，視運動性眼振(以下OKN)が逆方向に出現または，変動するものがLD群で７例中５例にみられ，追視については，年齢相当にスムースに追視できず，saccadicになるものがLD群に２例，目と顔の分離のできていないものがLD群に１例みられた。不器用なもの(具体的な所見としては，指の対立，指の模倣がむずかしいなど)がMR群では11例中５例に，LD群では７例中５例に，多動の児１例にみられました。継ぎ足歩行の上手にできなかったものがLD群では７例中３例にみられました。注視困難のものがMR群で１例，short attentionのものがMR，LD群各１例ずつみられた(表３)。

脳波は11例に施行され，図に示すように２例で発作波がみられた。熱性痙攣の既往のあるもの４人，てんかんは２例であった。

発達評価検査については，LD群では言語性IQと動作性IQの差が15以上あるものが７例中４例みられ，MR群の多くは両方とも低値を示していた。

表　2

| 周産期リスク | なし | あり |
|---|---|---|
| M　R(11) | 7 | 4（前置胎盤・帝切，微弱陣痛，母DM，妊娠中毒，双胎） |
| L　D( 7) | 5 | 2（重症仮死，骨盤位分娩） |
| 多　動( 1) | 0 | 1（MAS） |
| 自閉的( 1) | 1 | 0 |

表　3

| 神経所見の異常 | | |
|---|---|---|
| OKN　逆方向または変動 | ＬＤ群 | ５例 |
| 追視　saccadicなもの | ＬＤ群 | ２例 |
| 目と顔の分離不可 | ＬＤ群 | １例 |
| 不器用 | ＭＲ群 | ５例 |
| | ＬＤ群 | ５例 |
| | 多　動 | １例 |
| つぎ足歩行 | ＬＤ群 | ３例で下手 |
| 注視困難 | ＭＲ群 | １例 |
| short attention | ＭＲ群 | １例 |
| | ＬＤ群 | １例 |

## まとめ

以上の結果より，早期発見のための必要なチェック項目としては，既往歴として，出生歴，運動発達，哺乳障害など，3歳児健診では母の訴えで多動，視運動機能の異常，不器用など，が大切であると思われた(表4)。今後，境界領域児の早期発見のために，乳幼児健診におけるチェック項目の評価について検討したいと思う。

表 4

| 早期発見に必要なチェック項目 | |
|---|---|
| 既往歴 | 出生歴，運動発達，哺乳障害など |
| 3歳児健診 | 母の訴えで多動，OKN，追視の異常，不器用 |
| その後の経過 | 落ち着きがない，話し言葉の遅れ，不器用，継ぎ足歩行 |

母子愛育会図書室

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約
心身障害児の早期療育に欠かせない,早期発見基準の設定について検討した。乳幼児期の健診におけるスクリーニングに活用できることを目標とした。
従来の健診体制で見落とされた年長児の発達外来受診児を対象に,障害のタイプ,病歴,神経所見,発達検査の特性などを検討した。
20 例の分析から,3 歳児健診時の多動,視運動機能障害,不器用などが注意されていれば早期発見されていたものと考えられた。限られた健診時間の中で,発達境界児を早期発見する上で,これらの項目を見落とさないことが大切であると考えられた。今後,より本質的な健診項目の評価を設定することによって,発達境界児の早期発見を可能にする必要があると考える。